アメリカよ

新ニッポン論

■□4

「妻は家庭に」マッカーサー指令

核家族 崩れる幻想

「こんばんは、今日はカレーですか」「お先にいただいてまーす」

保育園児からおばあちゃんまで男女10人がテーブルを囲み、子どもの話など何気ない会話を交わす。大家族のだんらんのようだが別々の5家族で血縁もない。

独身者から4人家族まで11世帯が暮らす東京都豊島区の「コレクティブハウス巣鴨」。世帯ごとの部屋・設備とは別に共有のキッチンやダイニングがあり、夕食作りなど家事の一部を当番制で担当する。

当番で夕食を作るのは月の約半分。月に2、3度は自然と「一家だんらん」の場になる。ハウスの住民は「顔が見えるからほっとできる。家族のようなもの」と口をそろえる。ハウスを設立したNPOの宮前真理子理事(57)は「核家族暮らしがスタンダードという意識が今の社会を生きづらくさせている。多様な暮らし方を根付かせたい」と話す。

核家族観の普及は、GHQ(連合国軍総司令部)の指示で1947年、戦前の家制度が廃止されたのがきっかけ。それが「男性が働き、女性が家庭を守る」という形になった背景には、マッカーサーが45年、日本の民主化5大改革指令の最初に女性解放を掲げ、女性を「家庭の福祉に役立つ」存在と位置づけたことがある。

五つの家族がだんらんするある日のコレクティブハウスでの夕食
＝東京都豊島区で、梅田麻衣子撮影

豊田真穂・関西大准教授(占領研究)は「GHQの改革は女性を家制度から解放した半面、今度は家庭に封じ込めた。それが民主主義と共に資本主義を推し進めた当時のアメリカの家族観だった」と指摘する。

50年代の米国テレビホームドラマ「パパは何でも知っている」などに描かれたアメリカン・ウエー・オブ・ライフ(米国式生活様式)はその理想像だ。パパが会社から給料をもらい、ママが我が家で子育てし、消費生活を謳歌(おうか)。家から離れた労働力を必要とした資本主義社会に最適な姿だった。「戦後日本の家族観は冷戦の西側陣営に組み入れられた結果でもある」(豊田准教授)

東西冷戦の激化と歩調を合わせるように、米国ホームドラマは日本でも60年前後にお茶の間を席巻。高度経済成長が進む中で核家族が大量に生まれた。

♪家の外では坊やが遊び
坊やの横にはあなた
あなた　あなたがいて欲しい
それが2人の望みだったのよ
(小坂明子「あなた」)

団塊世代が結婚・出産期を迎えた70年代、核家族を幸せの象徴と歌う曲が大ヒットし、核家族は全世帯の半数近くに達した。

しかし、05年には30%を切り、社会保障・人口問題研究所は、2030年には22%にまで低下すると推測する。代わって全世帯の37%を占めるのは1人暮らしだ。

核家族は標準でなくなったが、「高度成長と共に歩んだ核家族は日本の成功体験。その幻想から抜け出すのは難しい」(宮前さん)。07年の内閣府世論調査によると「夫が働き、妻が家庭を守るべきだ」との考え方に45%が賛成し、女性も40%が賛成している。

巣鴨のハウスで女児2人を育てる共働き女性(39)は、いつか家を買って核家族で暮らす姿を想像していたが、夫婦と子どもだけの暮らしは「孤独感ばかり」と感じた。

出産後、夫の単身赴任で実家に戻ったが、子どもを預ける時、核家族世代の母親の「私たちは自分たちでやってきたのよ」という言葉がつらかった。今は「もう核家族暮らしには戻りたくない」という。

占領によるアメリカの核家族観に今も縛られる日本。崩れ始めた幻想を追い続けるだけでは、未来への展望は開けない。＝つづく

第4部 受容の終わり